

第二章 九月二日 飛鳥山での避難と危機管理の提起

渋沢栄一が帰宅し、仮設小屋で震災第一夜に耐えた王子飛鳥山は、日本橋から直線距離にして北北西十キロ弱、北豊島郡滝野川町に位置する。古来飛鳥山は江戸の名所として歌川広重や葛飾北斎の浮世絵でも題材とされた。広重の「江戸百景」には遙か筑波山を望みつつ、河原の広大な緑地に憩う庶民が描かれる。また、北斎画「飛鳥山の画」では満開の桜のもと、村落の道々を三々五々男女が遊歩している。王子製紙株式会社の建設のためしばしばこへ出向いた渋沢は、飛鳥山の麓西ヶ原に一万坪の別邸を築いた。彼が師事した高名な儒学者、阪谷朗盧によりその典雅な庭園が暖依村荘と命名される。①

王子別邸ハ明治十一年八月ヨリエヲ起シ荊棘ヲ開テ築ク所ナリ本邸ハ東京府公園ノ一タル飛鳥山ト遠ク筑波山、鴻ノ台ヲ望ミ近クハ一面ノ田野ニシテ村落点在シ戸田川ノ白帆ハ緑樹ノ間ニ隠見出沒眺望殊ニ佳ナリ当代碩儒阪谷朗盧名ヲ命シテ暖依村荘ト云ウ実ニ都下名園の一ナリ園内広豁ニシテ樹木鬱叢泉水アリ瀑布ア

① 白石喜太郎著『渋沢栄一翁』、八〇九頁。〔渋沢栄一翁 九二年の生涯〕夏の巻、二四八―二四九頁。〕

リ諸所ニ亭ヲ設ケ四時遊覧敢テ優劣ナシト雖モ春秋二季ノ風色最モ好評アリ毎年数次先生園遊会ヲ開キ内外名士多ク参集ス蓋シ本邸ハ大客ヲ招待スルニ最モ適ス民間紳士ニシテ外来ノ大賓ヲ招キ及ヒ朝野ノ政客学者実業家ヲ集合交際スルノ風ハ先生ノ率先セル所ニシテ園遊会其他交際上ノ体裁趣向コノ村荘ニ濫觴スル所多シ本邸建物今ヤ狭隘ヲ告グ更ニ大ニ改築中ナリ ①

やがてここに自邸を移した渋沢は地元住民との親睦のため、暖依村荘でしばしば園遊会を催した。「十一月十二日／日／晴」と大地震の前年秘書たる増田明六は日誌に書く。「午前九時半飛鳥山邸に赴く、今日は子爵ニ於て同邸を開放して滝野川町民の為に園遊会を催ふされたるに付き、其監督の為に赴きし次第なり、町民の来会者六百五十人、前十一時一同大天幕内に着席、町長榎本初五郎氏の開会の辞に次ぎて渋沢子爵の演説あり、終りて園遊会に移り、午後一時半余興開始、子爵には他に約束の場処あり、自動車にて他出せられたり。」② 当日なされた渋沢の演説と自作の漢詩を引用する。

幸に此王子には十二景などの名勝がある、斯う云ふ勝地に居つて、外国の人などの来たときには天然美を示して来客を慰めたい、斯る主義から、他の粗野になるに引替えて、庭園だけは家屋不相応に広く構へて居

① 『青淵先生六十年史』第二卷、九一二頁。

② 増田明六「日誌」『渋沢栄一伝記資料』第四八巻、三七七頁。

ります。然るに此庭園もさう誇ることの出来ぬやうになりました今日——此隣庭に晚香廬と云ふ小屋があつて、其処に掲げてある拙作の詩を摺物にして多分諸君の御手許へ差上げたらうと思ひます。

兼落梧桐影徒長。 纏看楓柏帶微霜。

不嫌小院秋容淡。 只有菊花晚節香。

此詩の意味は葉が落ちてしまふと梧桐が唯空に突立つて余り風情もありませぬ、それから楓や楡が少し紅くなつたけれども、是もお目に掛ける程のものでもない、故に此秋の庭は淡白で誠に物寂しい、只独り菊の花だけは晩節の香あり、後れて節を守るやうな香があると斯う云ふ趣向であります、蓋し辮鞭の寓意であります。晩節の香ありと云うて決して自惚れる訳ではありませんせぬけれども、成べく人は春の花の賑かに咲く時よりも、秋の菊の香の奥ゆかしい方が宜からう。殊に人生前半よりも後半が大切で老衰に瀕しても尚相当の努力を社会に尽したいと云ふのが私の最も希望する所であります。此意味からして仮令充分の働は出来ぬでも晩節を清くしたい。晩年に聊かの香を発したいと平素心に思うて居りますので晚香廬と名づけ、其処に寓意の拙詩を掛けて置くのであります。それを今日諸君に呈したのは前に述べた他人の人造美に対して、天然美を誇る積りでございます。去りながら庭園も庭園外も往時此園を設けた時分には暖々たり遠人の村、依々たり墟里の烟にて、恰も陶淵明の帰田園居といふ題の詠詩の中にありさうなる遠近の田家の景色が工合能く眺め得ました、それ故に此別荘を暖依村莊とも名づけたのであります。然るに今日は相反して暖々たりどころではなく、暗憺たり煙突の煙、辮鞭たり汽車の響にて全然昔に変わりましたけれども、是も即ち当滝野川町に五万人の人の居住するやうになつた為と町内の諸君が喜ぶと共に、私も亦暗憺たる煙突の煙も辮鞭たる汽車の響も喜ばなければならぬのでございます。詰り天然美が人工化した為に打毀されたのであります。併し

是は世の進みから起る事でありますから、私は少しも愁とせず、寧ろ之を喜ぶは矢張天然美を喜ぶ所以であらうと思ひます。之が私の庭園の沿革でございますから序ながら御紹介申して置くのであります。①

飛鳥山なる渋沢邸は行政的に北豊島郡滝野川町に属する。東京市の北部に隣接する北豊島郡は府下においても最も大きな被災地となつた。なかでも王子製紙や東洋紡績の工場を擁する王子町では、全戸数約一万のうち千二百余戸が全壊した。「此地域の各町は恰も帝都の北門を為し、東北方面・信越方面及常磐方面へ往還する要路に当れることとて、都下罹災民の都落ちを為す者の大半は、或は徒歩或は鐵路に依り、此地域を通路として殺到し」た。かくして「被害少なき巢鴨・滝野川・板橋の各町も、夫々重要な街道筋に当ることとて、奥州街道にまでの雑間を見、在留避難者も頗る多数に上つた。②

庭園に組まれた仮設小屋で渋沢が震災第一夜を送る一方、遠くは都心の各地から、さらには近隣の王子や田端から滝野川へも罹災者の群れが殺到し、暖依村莊門前の芝生へも大勢の男女が身を寄せた。田端文士村で屋根瓦の墜落と石灯籠の倒壊に驚愕した芥川龍之介は、妻子ともに飛鳥山方面への脱出をひととき準備したものの、病弱な身体への発熱で決行を断念する。

① 渋沢栄一「滝野川町園遊会に於て」『龍門雜誌』第四一七号（大正二年二月）。『渋沢栄一伝記資料』

芥川龍之介「大震日録」

九月二日

東京の空、未だ煙に蔽はれ、灰燼の時に庭前に墜つるを見る。円月堂に請ひ、牛込、芝等の親戚を見舞はしむ。東京全滅の報あり。又横浜並びに湘南地方全滅の報あり。鎌倉に止まれる知友を思ひ、心頻りに安からず。薄暮円月堂の帰り報ずるを聞けば、牛込は無事、芝、焦土と化せりと云ふ。姉の家、弟の家、共に全焼し去れるならん。彼等の生死だに明らかならざるを憂ふ。

この日、避難民の田端を経て飛鳥山に向ふもの、陸続として絶えず。田端も亦延焼せんことを恐れ、妻は児等の衣をバスケットに収め、僕は漱石先生の書一軸を風呂敷に包む。家具家財の荷づくりをなすも、運び難からんことを察すればなり。人欲素より窮まりなしとは云え、存外又あきらめることも容易なるが如し。夜に入りて発熱三十九度。①

仮設小屋で起床した洪沢は、その朝ふたりの重要な来客を迎えた。日曜学校協会主事の今村正一と次女琴子の夫、阪谷芳郎男爵である。両者との協議によって早くも飛鳥山で危機管理への提言が開始され、その第一は罹災

① 芥川龍之介「大正十二年九月一日の大震に際して」『芥川龍之介全集』筑摩書房、一九七一年。第四巻、

一九四一―一九五頁。

者への食糧確保に係わり、他は暴徒による犯罪の防止に関するものであった。『銀行通信録』に寄せられた証言を引き続き引用する。

洪沢栄一「大震災の追想と所感一二」その三

丁度二日朝第一に此近所に住って居る日本日曜学校協会主事の今村正一氏―私は宗家ではないけれども、終始同協会の為に力を添えてやりましたから、爾米、別して懸念にしている、矢張小崎弘道氏などの手に付いて、亜米利加のコールマン死などと同協会の為に尽力して居る人で、同氏が訪ねて見えて、自分も此土地に住むが市中大火の為どうも米が少くなつた。第一に送電が止まったので、米を掲ぐことが出来ないから白米が別してない、自分は埼玉県人であるが、埼玉県には米が十分あるだろうと思うから、貴方からお力添をお願い他からもお願いして、此の土地へ少し米を輸入して握飯的焚出をして見たいと思うが、どんなものでしょう。取敢ず必要の事と思うから、全然御同意します。宗家としてさう云う企をなさると云うことは至極結構だけれども、併し此地方に対してさう云う施設をすると云う上からは、尻切蜻蛉になって話が纏らぬやうになると面白くないから、矢張さう云う取扱は、相当な順序立つた組織に依ってなす宜しかろう。夫れには滝野川町役場に取扱はせる方が良い。貴方は自分でやらずに気付だけ与えて、仕事は其処でやって貰い、米に対する金の心配は私がしてあげる、それに対する物資の補助は私が尚ほ同志者と相談してやるやうにする、取扱は滝野川町長にやって貰ふという事であったならば、三つの力に依って相当の規模が出来るであらう、大した事は出来ないが、なにしろ皆難儀を受けて居るのだから―米の百石や二百石はどうにかなる

う、併しそれでは一つ町役場の人を呼びますから、能く相談してくれと云う話であった。〔中略〕

米の買入は今村と云う人の宗教観念の作用であった、それ故に此滝野川町は米の配給が大分都合よく行きました。此町は市に接近して居るものですから、市内から罹災者の這入って来たのが現在人口の五万余りの所へ四万余りにも達して殆ど倍加するような有様であったから、滝野川町の雑聞は一時えらいものでありました。総てに届いたか、どうか私は悉く明瞭に知っては居ませぬけれども、併し如斯二日に直ぐ手配したものですから始終玄米でなく白米を需用者に供給する事が出来たと云うのは、先ず東京付近の中では第一に算えられるようです。現に其最も著しい証拠は大学で玄米は得たけれども、どうしても之を白米にすることが出来ぬ已むを得ず玄米を用ゐて居る、けれどもどうも病人に玄米の粥は困る聞けば滝野川町には大分白米があると云ふことだから、何とかして日に五俵宛でも送つて呉れぬかと云うて近藤外科病院から言うて来ましたが、五俵位ならどうにかなるだらうと、助役に相談して五俵宛幾日間から十日以上配給しましたらう。之を以て見ても滝野川町は白米が満足であつたと云ふことは証拠立てられる。①

① 渋沢栄一「大震災の追想と所感一二」。『銀行通信録』第七六卷第四五五号、三〇―三二頁。〔『渋沢栄一伝記資料』第五一巻、二六一―二八頁。〕

〔参照〕白石喜太郎著『渋沢栄一翁』、八〇八―八〇九頁。〔『渋沢栄一翁 九二年の生涯』冬の巻、七七―七八頁。〕

つぎに訪れた女婿阪口芳郎はかつて大蔵大臣や東京市長を歴任し、当時貴族院議員の地位にあつた。「九月二日」と白石喜太郎の手記に記録される。「午前十一時頃阪谷男爵見エラル、子爵ト御相談ノ上渡辺ヲ派シ、内田臨時首相・警視庁・東京府知事・東京市長ヲ歴訪セシメ、罹災者ニ食糧ノ供給及バラツクノ建設、民心ノ鎮静、不穩者ノ取締等ニ付注意ヲ発セラル」①

渋沢栄一「大震災の追想と所感一二」その四

それは朝の事、間もなく九時頃であつたか阪谷男爵が来られて、丁度私が懸念して居るのを更に進んで、こいつは油断が出来ませぬぞ、事に依ると暴民が生ぜぬとも限らぬから、一つ政府に注意しようではありませぬか、私が行つてそんな事を騒ぎ散らすと少し穩当でないようだ、老人の氣付から言うなら宜い。内閣がどうなつたか、山本が立つと云うが、何しろそんなことは第二として仮総理大臣にでも言つてやるが宜い。夫れから警視庁に東京府に東京市に又内務省にも注意して早速米を入れると云う事と、それから戒嚴令を布くと云うこと、即ち飢饉に迫らぬようにさせるのと、乱暴を防ぐと云う事だけは、是非なさらねばいかぬと云うことの、注意を与えるようにしようではないか、貴方から言うてくれる方が工合が宜いと思ふ。場合に依つて阪谷も希望を共にすると言つても宜いからと云ふことになつて、折柄報告かたがた来合せて居た私の事務所の渡辺得男に交通機関がないけれども、場合に依つたら歩いて行つてもと云うて、今の事を総理大

臣、と云ふのは未だ内田さんの時でした、水野内務大臣、赤池警視總監、東京都知事、東京市長と申す向に、主として取締り救護の方法を至急に講ぜねばなりませんまいと云う事を、別に建議書ではないけれども、口上を以て申させました。それ等は今考へると矢張適當の方法であつたが之は決して私の氣付でなく阪谷の注意に教はつてやつたのである。①

阪谷芳郎は一八六三年儒学者阪谷朗廬の四男として備中に生まれた。朗廬は郷校興讓館を主宰して、多くの文人・文人墨客がそこを尋ね、洪沢もそのひとりであつた。語学に堪能な芳郎は国際連盟の創設にも寄与し、都市計画にも関心を抱いたとされる。彼の震災記録は地震発生時の身辺から始まる。このとき彼が居合わせた日本倶楽部は、学識者・実業家・政治家の交流団体として明治三十一年有楽町に建設され、洪沢は初代の副会長を務めていた。帝国ホテルからの延焼も免れ、日本倶楽部から脱出した阪谷は、本郷西片町で老母を安否を確かめたのち、小石川の自邸に無事帰着した。やがて公にされた回顧録には翌朝における洪沢家訪問、救済活動に関する栄一との連携も記録される。

① 洪沢栄一「大震災の追想と所感一二」。『銀行通信録』第七六卷第四五号、三〇―三二頁。(『洪沢栄一伝記資料』第五一卷、二七頁。)

〔参照〕白石喜太郎著『洪沢栄一翁』、八一〇―八一頁。(『洪沢栄一翁 九二年の生涯』冬の巻、八一頁。)

阪谷芳郎「大地震の回顧」

当日余は麹町区有楽町の日本倶楽部に居った。正午であるから二階の食堂に赴かんとして数名の人々と共に階子段を上りつつあつた途端にドンドンと二三度突き上たる様に感ずるとまもなくユラユラと来た。ソコで余はモ―家が崩れるか階子段が落ちるかと思つたが、幸に無事であつた。スルと眼前にあつた大時計が倒れる其他階子段の下の間にある物がバタバタと倒れた。余は幸に怪我はしなかつた。夫れから出口の方を眺めると幸に出口も破壊されず、諸方の家から多くの人が街頭に奔り出つたから余も往來へ出た。スルと前の警視庁の裏から火事が起つて黒煙が蒙蒙と立ち上つたと思つた又第二の大揺れが来て道路は波を打つが如く動き、余は殆んど倒れんとした。それから刻々震動が来たが、余はモ―怪我もなく命は助かつたと思ふた。幸に余の自動車戸口で待つて居つたから之に乗り直ちに宮城に行かうと思つたが、門鑑をもつて居らぬ事に気が付いたから止むを得ず宮城前迄行つて、御城を眺めると御所の御家根が御無事に見えたから先ず安心と思つた。

スルと本郷西片町に居る今年九十二歳の老母の安否が氣遣れてならなかつた。此日の朝余の妻と娘とは鎌倉に病氣療養中であつた他に嫁して居る次女の病氣見舞に行つて留守であつた故、多分東京が震源地で鎌倉方面は安全であろうと左程心配しなかつたが、後で鎌倉の方が東京よりも強かつたとのことを聞いて、その安否が知れる迄非常の心配でならなかつた。そこで病人の娘は不幸にも惨死したが、見舞に行つた妻と娘とは安全であつた。

余の自動車は宮城前から本郷に向つて走り始めた。途中内外ビルデングは倒壊して居り、その他多少は潰

れ家もあったが、神田橋もお茶の水橋も無事に通り、左程の損害も見受けなかった。本郷通りを帝国大学赤門の前に来ると、工科大学の教室が一棟火災を上げつつあった。自動車のなかで洪沢子爵の事やその他親戚友人の安否がドウであろうかと案じられてならぬ。又今に市中は八方大火が起るであろう。人心險悪の結果或いは騒動が起らぬとも言えぬ。夫れには一刻も早く戒嚴令を布き、兵を出して、諸方を警戒し、又騒動は第一に食料の不足から起るものであるから、何でも地方から米を移入するの手段を真つ先に取らねばならぬと考えた。その内に自動車の本郷西片町の老母の宅の近所の陸橋の所迄着いたが、陸橋が破損して自動車が通らぬので、自動車には廻り道をさせて余は徒歩で老母を訪ねた所が、老母は看護の人々に助けられて大きな椎の老木の下に避難して居られて無事であった。老母の家も幸に破損が軽微であった。ソコで看護の人々に老母の事を頼み、後々のことを注意して置いて小石川区原町の自邸に帰ろうとすると、幸にも陸軍の某武官に出会ったから、余は即時出兵の事と米の事を陸軍当局に伝言を頼むと、快よく承諾の旨を答えられたから大に安心した。

午後一頃頃に自邸に帰着したところ邸内には近所の避難者が多数来ておられた。何れも負傷者はない様であった。余の家は家根の瓦が損じ、壁に亀裂が生じた位で、大した損害はなかった。然し、電話電燈瓦斯水道等は皆な一時に損じて用をなさぬとの事であったから、人を派して米沢庵蠟燭等を買入る用意を命じた。幸に四五日間は支へられる用意が出来た。又鎌倉に行った妻と娘の安否が不明であるから使を鎌倉に出したが、これはその辺まで行くと、何分大火事でも通行はできぬ、と云って夜になって引き返して来たので、翌朝早く自転車で事慣れた者二人を出したが、これはその日の午後鎌倉に到着して、妻と娘に出会える事が出来た。妻と娘はある筋の自動車が空車で帰るのに便乗を頼み、八王子街道を廻って三日の夕刻に東京の宅に安着した。この時は真に夢かと思はるほど嬉しく感じた。

二日の朝王子の邸に洪沢子爵の安否を訪うた。子爵は地震の時は兜町の事務所に居られたが、事務所は著しく破損したが、子爵は幸に無事に第一銀行に避難し、のち自邸に帰られたが、その後火事のために事務所も第一銀行も焼失し、子爵多年の旧記録も残念ながら焼亡したとの事である。王子の子爵邸は倒壊はしなかったが、土蔵や壁の破損は随分甚だしく、子爵は家族と共に庭の広場に居を造り、これに避難して居られた。余はまず子爵の無事を祝し、子爵の秘書役の渡辺君を使として政府当局その他に向かつて速やかに戒嚴令を布くこと、米を地方より取寄せることの二件を勧告した。この事は大いに効能があったと思われる。

それから余は宅に帰り、地方の親類に手紙を出すやら、町内の警戒やら谷中の墓地にある父や兄の墓碑の様子を問い合すやら、遷都論の駁撃やら大小種々震災善後策に就いて奔走したのであった。①

洪沢栄一の次女である琴子は、女性の社会参加として外国人への接待と社交もできるよう育てられ、語学に堪能で芸術を愛した。優れた母および祖母としては家族による追悼集『しのぶのつゆ』（私家版）において親しく語られる。また、彼女は「貧困ニシテ医薬ヲウル資力ナキ病者ノ施療」を支える東京慈恵会の役員をも務め、な

かでも明治四十年に慈恵病院拡張のため姉穂積歌子とともに尽力した。① 右に転記した震災回顧では僅かな言及に自制されるものの、九月一日は阪谷家にとって傷ましい痛ましい受難の日となった。一男三女の母にして病床にある次女和子は、見舞に訪れた妻琴子と四女総子とともに、高嶺別邸で激甚な地震に襲われたのである。同家に所蔵される『阪谷芳郎家庭日記』には次女即死の惨状とともに、祖父渋沢の弔問が誌される。

阪谷芳郎『家庭日記』

九月一日

午前八時ノ汽車ニテ琴子総子、和子見舞ノ為鎌倉ニ行ク 途中穂積男葦山へ赴カルル同車ノ由 坂上順次
琴子一行ニ同行ス 然ルニ交通遮断ノタメ消息不明心配ス

九月二日

大工辰二郎及運転助手堀田二人ニ命ジ自転車ニテ鎌倉へ赴キ琴子一行ノ消息ヲ探ラシム 横浜小田原等海
嘯大被害ノ報アリ 一同深ク心配ス

九月三日

琴子聡子 坂上ヲ伴ヒ午後帰宅ス

① 『渋沢栄一伝記資料』第二四巻、五三六―五三九、五四九、五六〇―五六一頁。

〔参照〕伊藤真希「阪口芳郎の家庭教育」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第六号（二〇一一年）

琴子一行ハ九月一日高嶺別邸ヲ訪ヒ和子ノ病氣ヲ見舞ヒタルニ和子ハ既ニ脳症ヲ起シ重態ノ模様ナリシモ
和子悦ヒ礼ヲ述べ食事ハ三橋ニテセント云ヒシヲ和子ハ取寄セントノ言ニ従ヒ、ソノ儘ニテ折柄見舞ノ坂田
医師ニ話シナガラ総子ヲ二階病室ニ残シ同氏ノ帰ルヲ送り玄閣ニ至リタル途端大地震トナリ別邸丸潰レトナ
ル 総子直チニ身ヲ以テ病人ノ和子ヲ覆イタルニ家根破レ不思議ニモ其間ヨリ外へ出タリ 総子ハ直チニ坂
上ヲ見付ケ兩人ニテ琴子ヲ探シタリ 琴子ハ梁ノ下ニ圧セラレタルヲ兩人ニテ漸ク引キ起ス 琴子総子兩人
は打撲過傷負ヒタルニ殆ド無事 坂上は最初大震ニ屋外へ投出サレル亦無事 坂田氏も手ニ傷スルモ屋外へ
投出サレ助カル 看護婦二人女中一人モ一旦圧セラレタルモ家番加藤坂上等コレヲ引出ス 何レモ負傷大ナ
ラズ 和子ハ大地震ノ驚キニ心臓麻痺ヲ起シ即死ス 夫れヨリ海嘯来タリ琴子水中ニ倒タルヲ総子帯ヲ引上
助カル 次デ三橋ヲ始メ諸処大災起ル 琴子一行ハ長谷大仏ニ避難シテ救助飯一ツニツ過セシ折柄東京ヨリ
遣シタル堀田及辰二郎到着ス 辰二郎ハ大工ナレバ直チニ坑ヲ造リ和子ヲ火葬ニ付スルノ手ツツキヲ取ル
堀田ノ計ラヒニテ山階宮妃殿下圧死ノタメ東京ヨリ来リタル自動車ニ乗セテモラフ 藤沢ニテ二時間 夫ヨ
リ八王子ヲ廻リテ帰京セルナリ 和子ハ三日火葬ニ付シ其遺骨ヲ堀田及辰二郎収容四日帰京

九月四日

高嶺俊夫来タル和子遺骨ハ当該寺（徳恩寺）ニ預ケ葬式ハ他日ニ延期ス

穂積男夫人、渋沢政雄見舞ニ来ル

穂積重遠氏使来リ琴子及総子ノ安否ヲ尋ネル

九月八日

一八九一年阪谷芳郎の次女として生まれた和子は、二十歳にして物理学者高嶺俊夫と結婚した。親戚知己によ
う帝国ホテルでの祝宴に続いて、築地精養軒での披露宴には大勢の名士貴顕が招かれ、余興には狂言が演じられ
た② 花婿の父はベスタロッチ主義を導入した高名な教育学者であり、俊夫自身も長岡半太郎らとともに分光学
における業績でいま知られる。

洪沢Ⅱ阪谷家系からひとりの命を奪った当地の惨状については、町長を初めとする編集委員によって総括的な
史料『鎌倉震災誌』が七年後に刊行される。「午前十一時五十八分、突如として、大地も覆へらんとする大地震
襲来し、次いで午後零時四十分強度の余震が襲来した。震源については、学者の観測区々であるが、相模湾の海
底とする説が有力でその震幅は正に四寸に達したと称せられた。此の激烈なる震動により、鎌倉町四千戸の民家
は殆ど倒潰し、土蔵石造煉瓦造の如き建物は、見る影もなく烈壊粉砕した。殊に災禍を大ならしめたものは、震
災に次ぐ火災と海嘯とであった。」「海嘯は所謂第二震の直後、爾後二回に互つて襲来し、その第二回目のもの
は、第一回のそれよりも遙かに大きく。高さ実に三丈に達したといふ。これによって乱橋材木屋、長谷新宿、坂
の海岸に於いては、地震により危く倒壊を免れた人家を圧倒し、人命を損じ、船舶家財を流失した。」大火に

① 阪口芳郎『家庭日記』第五卷、四八―五〇頁。(国会図書館『阪谷芳郎関係文書』六九七)

② 洪沢栄一「日記」ほか。『洪沢栄一伝記資料』第五七卷、六八―六九頁。

至る火元のひとつは、長谷観音門前に立つ評判の観光施設、料理旅館三橋とされる。「同旅館は建坪千坪に近い
大建築であったが、第一震と同時に倒壊し炊事場から発火した。火は火元が大きいだけに忽ち四方に燃え拡がり、
東方は神明前二百七十四番地、二百七十二番地に至り、西方は観音前より光則寺大門を経て北方大仏通五百七十
一番地より川を越えて見越岳西麓に達し、同所より神明前に亘る一帯の区域を焦土と化し、一方尻火は二十番地
及二一番地を焼いた。」①

倒壊した主要な建築は、鶴岡八幡宮、極楽寺、鎌倉銀行、鎌倉町役場、御用邸、山階宮別邸、伏見宮別邸のは
か、松方侯爵や前田侯爵などの別邸が挙げられる。明治なかば官営鉄道の延長に伴って、鎌倉は避暑・療養の適
地として注目され、皇女のため御用邸が造営されたのをはじめ、多くの貴族や名士がここに居を構えた。地震の
とき当地に居合した元老松方正義は脚部に負傷し、池田亨子侯爵夫人と芳川貞子伯爵夫人は圧死する。『近代の
恋愛観』の著者たる英文学者厨川白村も津波に流され急死した。② 皇族に關しても東久邇宮師正王が鶴沼で、
閑院宮妃寛子が小田原で、山階宮妃佐紀子が鎌倉で地震のため逝去するが、とりわけ悲痛である山階宮妃の絶命
は、病床における高嶺和子の最期とやや似通う。

御いたはしき限りなりしは、山階宮妃佐紀子女王殿下の御最期である。殿下には、昨春御成婚の盛儀を奉

① 清川来吉編『鎌倉震災誌』鎌倉町役場、一九三〇年。

② 『鎌倉震災誌』六五、二八一―二八二頁。

げさせたまひて以来、背の宮武彦王殿下との御話らひ、いとも御むつまじく、近くは、つねならぬ御身との芽出度き御事さへ洩れ伝はりて、竹の園生の御栄え、仰ぐだに畏き限りであったのに、悲風一陣、今はこれすべて夢、背の宮の御哀愁、さては御母宮賀陽宮の御衷情、推しまみらすも、なかなかに畏れ多き極みである。

この日、女王殿下には、御母宮賀陽宮大妃殿下御列席にて、背の宮武彦王殿下が、追浜海軍航空場へ御出張のあと、吾妻勝剛博士を召され、拝診方を命じさせたまひ、鎌倉由井ヶ浜なる御用邸内の階下の一室にて、今し、拝診中であつた。

と、天柱折れ、地軸砕けしかと思はれた大震は、あれよと呼ぶ間もなく、さしも御用邸として堅固に仕上がらへられた建物をも、無残、微塵に打ち砕き、女王殿下はじめ、拝診の吾妻博士並びに侍女を、立ち上るいとまもあらせず、あはれ、梁の下敷きとなし、申上げやうもなき傷しき御最期、更に、三尺程へだてたあたり、御座あらせられた御母の宮にも、痛手を負はせるもの、惨また惨、この世の事とも覚えぬ、悲痛なる光景が、眼のあたりに現出されたのであつた。①

二〇二三年二月一日 初出